

～佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ 2019 によせて～
薄井憲二バレエ・コレクション常設展

vol. 74

『オン・ザ・タウン』

展示期間 /
2019年6月19日(水)～8月20日(火)
(※ 休館日はwebでご確認ください)

企画・構成 /
関典子(薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

7月に上演される佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2019『オン・ザ・タウン』公演によせた展示をお届けします。

1944年暮れ、ブロードウェイは新作の成功に沸き立っていました。作曲家レナード・バーンスタイン(1918-1990)、振付家ジェローム・ロビンス(1918-1998)ら、当時20代の俊英たちが創り上げた『オン・ザ・タウン』(後に映画化、邦題『踊る大紐育』)は、ミュージカル黄金時代を拓いた画期的な作品です。このとき、輝くばかりの魅力で観客を熱狂させたのが、主演のソノ・オーサト(1919-2018)でした。日米戦争さなかのアメリカで、小柄な日系人のソノがミュージカル・スターとして一世を風靡したのです。

オペラ鑑賞のお供に、当時の資料をお楽しみください。

ジェローム・ロビンス (Jerome Robbins 1918～1998)

アメリカのダンサー、振付家。バレエのみならず、スペイン舞踊、モダンダンス、演劇、ミュージカルなど、様々なジャンルの舞台芸術を学んだ。1940年にバレエ・シアター(現アメリカン・バレエ・シアター)に入団直後から、ソリストとして活躍。1944年に振付けた『ファンシー・フリー』は、同年ミュージカル『オン・ザ・タウン』(1949年映画化)として翻案され、大成功を収めた。1949年ニューヨーク・シティ・バレエに移籍し、ダンサー・振付家・監督補佐を兼任。同時期にブロードウェイでも活躍し、『王様と私』(1951年初演/1956年映画化)、『ウェストサイドストーリー』

(1957年初演/1964年映画化)など、数々のヒット作を生み出す。バレエやモダンダンスを、ジャズその他の同時代の流行と融合させ、鋭くウィットに富んだ現代的な登場人物を描き出すことを得意とするスタイルで人気を博した。

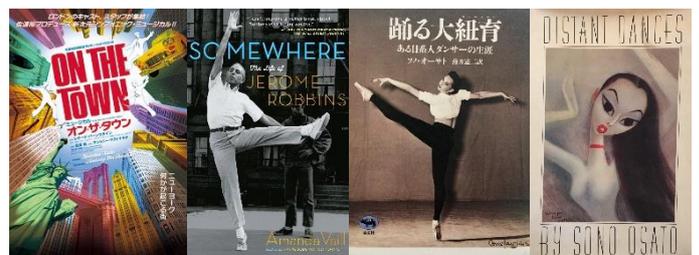
ソノ・オーサト (Sono Osato 1919～2018)

—1930年代半ばから50年代にかけて世界的に活躍したこの踊り手の名を知る人は少ないだろう。1922年にアンナ・パヴロワが訪日して以来、ほかにバレエらしいバレエを見られなかった戦前の日本にあつて、伝え聞くバレエ・リュス・ド・モンテカルロの輝かしい活動も、そこにひとり日本人の踊り手がいることも、まったく夢のようなできごとと思えた。こちらでは、バレエとはどういうものか手さぐりで模索している状態だったのに、混血とはいえ日本人が檯舞台で踊っているのだ。ダニロワ、トゥマノワといった世界のバレリーナに伍して堂々と踊るソノ・オーサトの存在に、われわれ戦前からバレエに関わっていたものはどれだけ勇気づけられたかわからない。

(ソノ・オーサト『踊る大紐育～ある日系人ダンサーの生涯～』
薄井憲二訳/晶文社/1995年/362頁/訳者あとがきより)

主な出展リスト

- ◆PR-USA-007 プログラム/『Jerome Robbins' Broadway』インペリアル・シアター/アメリカ:ニューヨーク/1989年2月26日
- ◆BK-2947-bio 書籍/アマンダ・ヴァイル『Somewhere: The Life of Jerome Robbins』アメリカ/2008年
- ◆BK-0037-bio 書籍/ソノ・オーサト『Distant Dances』アメリカ/1980年(翻訳『踊る大紐育～ある日系人ダンサーの生涯～』薄井憲二訳/晶文社/1995年)
- ◆PH-D-191 写真/ソノ・オーサト/大晦日、レオニード・マシーンと共に/アメリカ:シカゴ/1934～1935年
- ◆PH-D-190-01 写真/ソノ・オーサト/バレエ・リュス・ド・モンテカルロ時代(1936年)



《左》フィオレロ・ラガーディア市長に『オン・ザ・タウン』一座の記念アルバムを贈るソノ・オーサトとレナード・バーンスタイン

《右》『オン・ザ・タウン』リハーサル(共にソノ・オーサト自伝より)



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断転載・複製・引用